

事
情
明
治
太
平
記

村井靜庵著

十二編

上

へ遠14

2504

26-21



特 14
2504
卷 26-27

官許

明治太平記

全

村井靜馬編輯
鮮齋永濯畫

東京書林

延壽堂發兌

天字

天字

天字

天字



○今の朝鮮の
始祖李成珪ハ

異僧

始り安邊と入所の萬戸召多
 適野外ニ雁鳥狩チ秘藏の
 雁鳥奉を者羽て乍ち林の裡ニ
 入りたり成珪と追グ跡を
 追ふ々山林ニ分入りニ
 茲一宇の禅室ありと室中ニ
 一個の異僧あり成珪を見て言テ
 雁鳥を求め々何の益クハ有る奚ト
 王位を求めざると是ニ於て成珪ハ乍ち
 悟る処なり頓て京城ニ赴き々後遂ニ
 此国の王位ニ即クニ至ると入

李成珪





卷之弍

英の公使の媒和より遂に支那の大臣等が五十万兩の償金を出さず約書は調印さるるに始り遂に臺清の事治りて大久保大臣西郷都督等帰朝するに終る

卷之弍

支那の政府より電信線を架さるるに魯西亜及び丁林より支那と詰問するに始り話説更って我が雲揚艦朝鮮に至るに及び測らざる事の起らんとするに終る

明治太平記十一編卷之一

東京 村井静馬著

再説大久保大臣ハ支那との和談破れしにバ急ぎ

帰朝の準備を整へ翌日ハ北京を發せんませ

其前日十月廿六日測らざるも英國の公使ソルウエードに

來訪し及び一々豫て相識る中ある故頓て

客席に迎へ入る寒暖と演べ安否と問ふなど互に

の口誼終りて後英の公使が言へるやうに君よる



明治太平記十一編上

既^もに九月^{いづか}以来^{いらい}種々^{たぐ}談論^{だんろん}し及^{およ}ぶれ^ら彼^{かの}臺灣^{たいわん}の
 一^{ひと}条^{じょう}も大^{おほ}概^{がい}和^わ議^ぎし至^{いた}るべ^きの漸^{しだ}く場^ば合^あはあ^らう
 所^{ところ}約^{やく}書^{しよ}と出^いせ出^いさね^いと言^いふ其^{その}掛^か合^あが行^ゆ届^とる
 終^{つひ}は是^{これ}迄^{まで}盡^つされ^り苦心^{くしん}も水^{みづ}泡^{あは}とあ^らう翌^{あす}日^ひハ歸^き
 國^{くに}も及^{およ}ぶる^らとの其^{その}趣^{おも}き伝^つへ^ら听^きき駭^{おど}き思^{おも}ふ
 所^{ところ}あり事^{こと}ハ破^やる^ら易^{やす}く^て治^さめんと^もするハ甚^{せき}ど難^{がた}
 尤^も己^{おのれ}と得^えざる^ら於^おこ^へ又^{また}是非^{せいひ}もあ^らな^らず
 兩^{りゆう}國^{こく}兵^{へい}と交^まり^し至^{いた}ら^ば為^なる^ら無^む数^{すう}の人民^{じんみん}と害^{がい}ひ

巨^{きよ}萬^{まん}の賦^ふと費^ひさん^ん支^し實^{じつ}は元^{もと}益^{えき}の至^{いた}りと言^いふへ
 尚^{なほ}一^{ひと}層^{そう}の思^し慮^{りょ}を加^くへ無^む事^じと計^{けい}ら^ひな^らず
 勸^かめ^らる^らと大^{おほ}久^く保^ほ公^{こう}ハ情^{じやう}听^{てい}る^ら形^{かたち}容^{よう}と改^{あら}め^ら君^{きみ}が厚^{こう}意^いの
 赴^{おもむ}き^て謝^{あや}まる^らし辞^{ことば}ふ^らし雖^{すな}も^もち^や施^せま^らず術^{じゆつ}と
 知^しら^ずも身^み職^{しやく}固^こより和^わを主^{しゆ}と^もれ^ば百^{ひやく}方^{ほう}渠^けと討^{たう}論^{ろん}
 一^{ひと}と^も事^じ切^き迫^{ぱく}し及^{およ}び^し故^{ゆゑ}已^い支^しと得^える^ら償^{しょう}金^{きん}と出^いす
 との語^{ことば}ハ発^{はつ}せ^しし^らど^も這^こも^も是^{こゝ}彼^{かの}が狡^う黠^{てつ}より吐^いく所^{ところ}の
 一^{ひと}句^くも^も其^{その}言^{ことば}と心^{こゝろ}と必^{かなら}ず反^{はん}對^{たい}する^ら支^しり^し其^{その}故^{ゆゑ}と

奈何とりよいふの既おもに去年きょねん副島大使ふくしまたいしが蕃地ばんちの事ことと論ろんぜ
し時とき渠かね返答へんたうし及びおよびひたる辞ことばとの證しるしとして其そのとん約やく
書しよと得えぎうし故ゆゑ支那しな人表裏ひょうりの説せつと唱となへる恠つゝる異い
論ろんよ及びおよびしあり余われバ這回こゝの償金しょうきんも渠かねが辞ことばとの信しんト
和議わぎ整ととのひぬと心得こころえる蕃地ばんちの兵へいと退あざせけし後のち又またもや
異議いぎよ及およびんとする伎倆ぎりやう多おほき夏明なつあきらけし渠かね尚なほつらく
和わと好このしく償しょうと出いすもの心こころつらくバ約書やくしよと取交とりかしられ
ハとく妨まげげつる人ひとき夏なつあつぬと只管ひたすらあつて強固きやうこ辞ことば

あるハ則すなはち一時いつじの詐謀さぼうあり弁せと知りあぐり何時いつとき迄いたり
渠かね等らよ愚弄ぐろうせりる人ひとき速すみくふ本邦ほんぱうへ還かへり破議はぎの
次第しだいと皇帝てんていよ奏そうしと又また為なす所ところつらくしと言いふは
公使こうしが慰なぐさめく君きみの決心けつしん定まし余義よぎもし然しかれども
又また身職みしやくが退あざせつる考かんがふるよ當國たうこくの大臣だいじんが只ただ戦いくさふを
音ねとくしと和わと好このしとある者ものあつて苟くわうも償金しょうきん
の語ことばと發はつせりるき謂いわふし然しかるは軍費ぐんひと償しょうはん
と言いふも渠かねも平穩へいゑんあつしとめんと言いふ必かならず心こころ

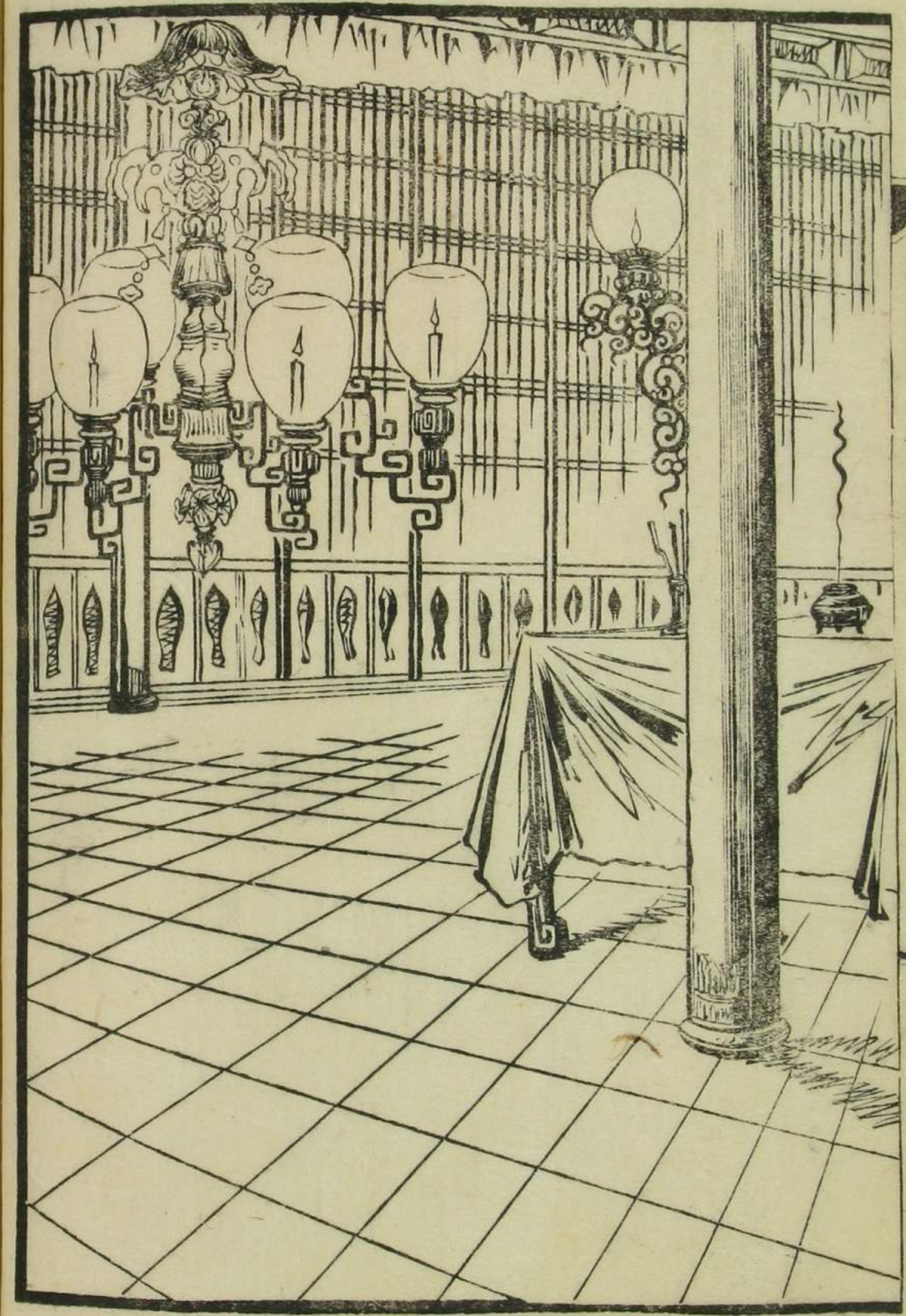
月台太平巳二編一

何と云へばあるべし我々局外中立にして何事も負
張為べき事と在らば和の調ふべき事あるべし
の限り周旋あるべし是兩國へ信義を立る事と我
輩の職分あるべし姑く預け置とんよ成否は
知らざると雖も身職是が媒和せんと最懇ろ
言入るるを大久保公も稍須臾黙して思按の体
ありしが我々名義の明く立る和議と及ぶの
事ありば好まざるの所よりわづねて遂に公使の

意に任せり是に於て英國の公使の直ちふ總理衙門
に至り則ち支那の大臣等と條理を演べ利害を
示し懇々説諭し及び一に此時支那の政府と
との勢ひ引よ引よざるより嚮て手切との應接へ
為たれど今日既して大久保公の歸國有るを以て
報知を聴く事今ハちや兵端張開との外ハ何
ねども恠くあらず自國に於ても又妙ありぬ所
も何事ハ今一回引留と和議の示談し及ぶる



明治太平記上編上



明治太平記上編上

七

みどおのく會議かいぎ及び額ひらを聚あつめて叫よく所ところへ英えいの
公使こうしの来訪らいぼうあり斯かくの如ごとく言いつる支し也支し那な人じん爰こゝ
便宜べんぎを得えて遂つひに約書やくしょを出いすきの決けつ答たよ及び
く英えいの公使こうしいさ閣かくを其夜そのよ三時さんじと覺おぼしん頃ころ再び
馬車ばしやを走まらせし大久保公おおくぼこうの旅館りやうかんに來きり示談しだん整
ひたるより派筒はつとう様々さまざまと報知ほうちらせ就つひし十月じゅうがつ三十一日
件けんの約書やくしょに調印てういんと致いたすきの決定けつぎ為なられ其時そのとき
より英えいの公使こうしも證印しやういんまをすの赴おもむきを具つぎし演説えんざい

為ならるる大久保公おおくぼこうを英えいの公使こうしの信義しんぎを厚あつく
謝しゃせらるる
因ゆゑより支那しな國こくに即今そくこん軍備ぐんびも整よく整ととのひ兵負へいふも
まこと甚おほく多おほく殊ことしへ李鴻章りこうしやう等らの如ごとき智勇兼ちゆうゆうけん
備びの將しやうも如ごとき我われが日本にっぽんの如ごときと小國せうこくと侮あひりて
一戰いつせんの下もとに追崩おひたれし勢いきひ如ごとき似にしれども其その
實じつは全く介まじらるる七十餘しちじゆ万まんの兵へいといふも只頭數ただあたまごの揃そろ
ひのいふ未いまだ調練てうれんの熟じやくせし甚おほく金穀きんこくの會あひ

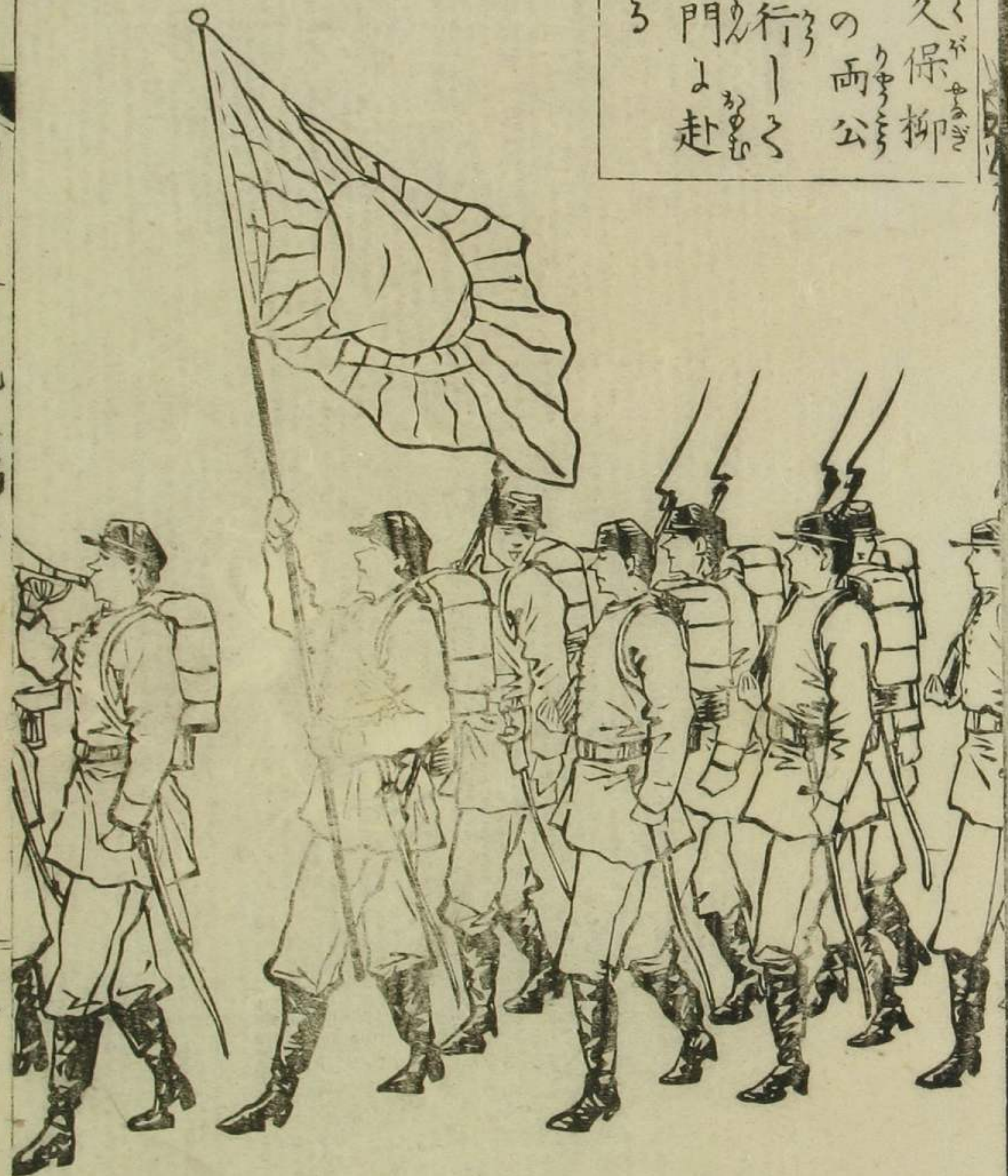
計も又甚と不如意より軍用は充るふ乏しく
 所詮兵端を開くとも全勝を得るといふ見込ハ曾々
 ねども是迄は言募り一紙今更償金と出ばと
 言ふ約書ハ調印を時ハ國の名折と思ふ故
 右と左りと言ふ一と免ふ角蕃地の日本勢は
 退らせんと計り一ハ大久保大臣其機と推して遂
 一手切の談判は及び此地を發するといふに至り支
 那の大臣にていまして窺ふ英の公使を頼まの

仲和は及び一と言ふ一説ハ何れと雖も支那人奈
 何は柔弱なりと事と英人ハ依頼しと嘲
 りハ萬國ハ招ぐの如き失策ハありしと這ハ
 本編ハ記する如く英の公使ハ厚意より和
 議を勧め一ハそのあつんが公使ハ懇談を至
 らく速くふ件の約書と出まると言ひ一ハ
 思へば支那ハいとも此事件を甚と持扱ひ
 一と見えたり

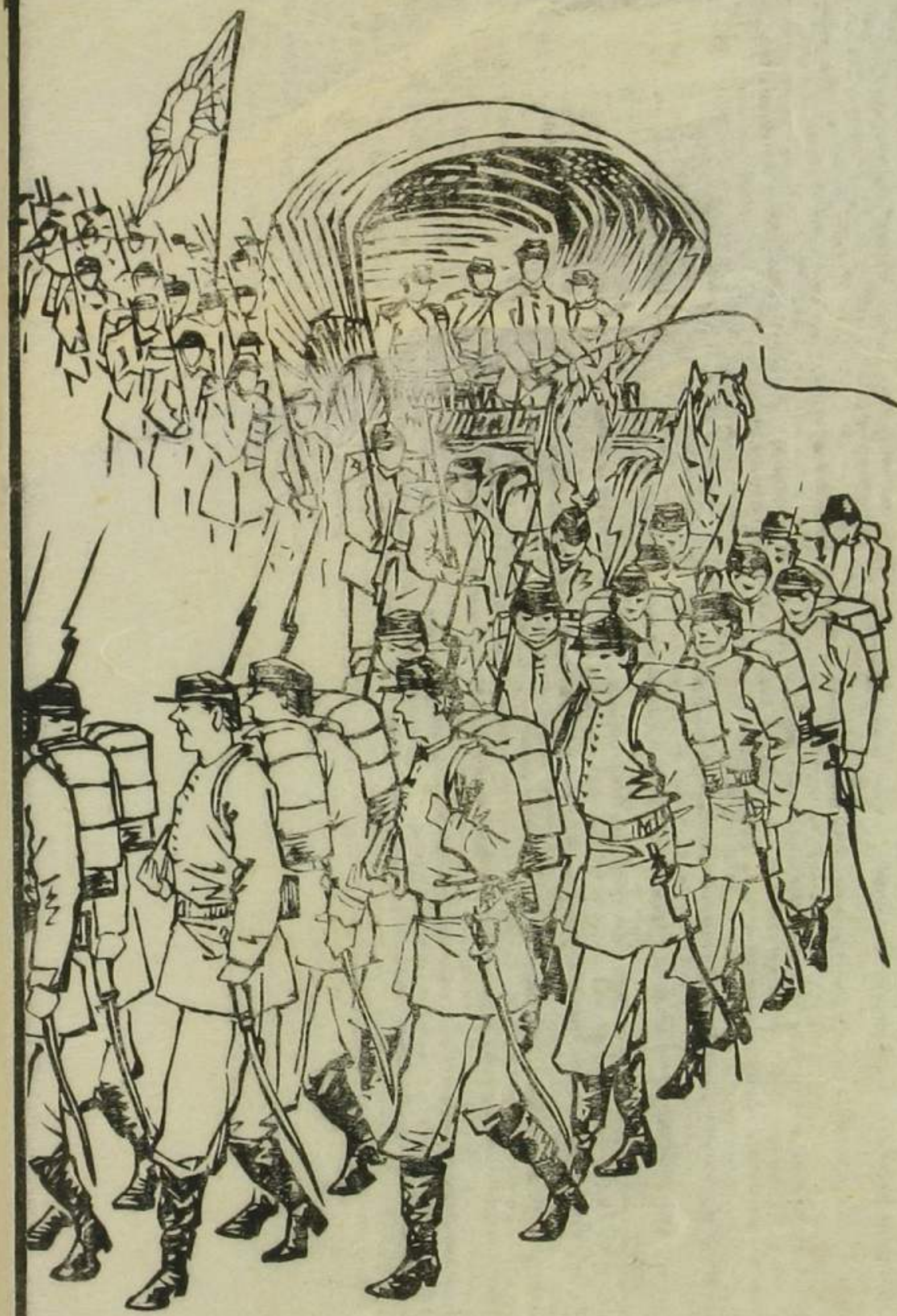
間話休題かゝり十月三十一日に至るべ大久保柳原
 の両公ハ隨從の諸官員其他護衛の兵隊と俱しく此
 日と晴と打扮々總理衙門に趣うれば則ち英の
 公使みも此席に出張り其時支那の大臣以下諸
 の官員數十名何とも坐中相對して更に和睦の
 応接に至るふ尚支那の一字亦忌嫌るの
 所られれば則ち爰に名義を換て先年臺灣の生蕃の
 為に害せりとたる日本人の扶助金とて十萬兩入

日本の手を以て這回臺地の道路を開き家屋を造
 りあせしむる其儘支那にて用ゐられればその價とて
 四十萬兩合せて五十萬兩と日本へ捧ぐべし尤も金の
 拂方ハ上海の税關よおつて即金十萬兩と渡し
 殘金四十萬兩ハ金と上海に備へ置きて日本の兵
 臺灣を引拂ふと同日に渡すとの談判既よ整
 へり是よ於て記載の別ち約書の趣きより往年
 臺灣の生蕃等日本人を害せし故日本その罪を

大久保柳
 の両公
 原の
 車行
 街門
 へ赴



月台太平巴上編上



明治九年三月

問んたり兵隊蕃地へ遣はせしる民と保護する義
 奉る故清國指す不是とせば又その害に遭ふる
 者へハ撫郵銀と給まなく且つ日本も其臺灣の地へ
 道を作り房と建しハ清國留めて用ゆると願ひ銀
 と出し補ふべし總て這回ノ事件はつた往復
 みせし一切の書簡と撤回しとあはしと註銷ふし是
 ろく永く論と罷り臺灣の生蕃ハ清國宜しく法
 を設け航客と保護しと再び兇害と受さるる事

とぞ尚外ハ一通りと彼金高の譯と記し十萬
 兩ハ即時ハ渡し残る四十萬兩ハ十二月廿日支那の土
 を期しと日本の兵とを退け全數の金も渡ひべき
 強約を其時ハ至り日本の兵蕃地を退き尽されば
 支那も又全數の金と渡せし趣きを記し
 以て證とせし則ち件の二通の約書ハ双方ハのく調印
 ありと交換し及びハ和議漸くハ整ひし
 因ハ言ふ支那の壹兩ハ我ハ壹兩より高價され

這回渠より償ふ所の五十万兩ハ大約我ガ八十
五万兩も當れりとのぞ

介程ハ大久保大臣より和議全ク整ひし急ぎ是
等の趣き派奏聞し及むんと開拓使七等出仕小牧
昌幸外二名を即刻帰朝致さし其身も十一月一日
ト自餘の附屬の人々と俱ハ北京と出立せし是ト先
臺灣より立寄りて西郷都督より面會り則ち支那
に應接の次第和議に至りし約書の趣き箇様々

と演説り就く不日我ガ朝廷より凱陣の御沙汰
在るべければ退軍の準備するべきと懇ろに談合
りり又臺灣と出帆せらる是より先小牧昌幸等ハ
頻りみ船路と急ぎつ既に十一月十二日東京より立
り清國との和議整へるの顛末及び約書の趣き
まと言上し及べるめど天皇殿聞りし侍從
長東久世通禧と勅使として臺灣より派遣され都督
西郷從道より凱旋の命を傳へし因て十一月十四日

蕃地の少
 女姑且東
 京に在り
 和議整ふ
 よ及びこ
 り送る



月夜不巴二編



月夜不巴二編

四

東久世より品川より既に出帆せしむるに、曩は臺灣より我邦へ召連来りし一少女と則ち件の船に托して蕃地へ送り歸されし。此少女や初め我兵に捕へらる遙々日本迄引籠りて其身より不幸の似されど渠東京ふ来りしより上田發太郎といふ者願ひし依りて預けらるし。上田氏懇ろふ少女を教導をて數月逗留せしむるに日本語をも學せし殊更蕃地に在る間、目しつるに見ざる所の美々たる衣服

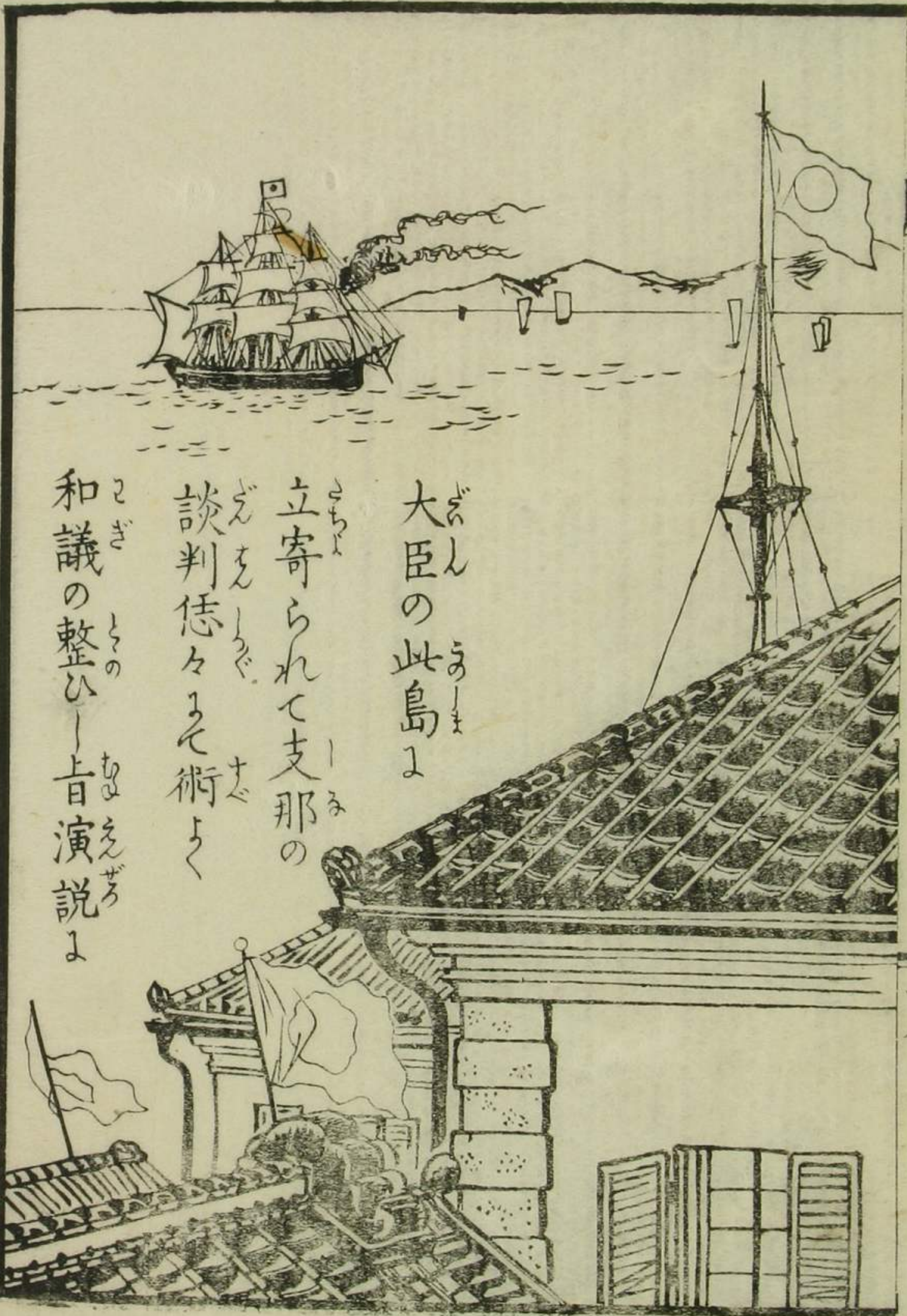
を身し纏ひ口ふ常なる食を多た美食と常し食へるのこゝろ、這回故郷へ還さるし付るに日本製の人形團扇その他種々の土産を賜り手厚くゆてふしあひぬる。此恩恵と被るふ至りしは、又是少女の大幸といふべし。他日蕃地に立飯らば其父母親戚雀躍し、余を歡ぶ。更なる一恁し十一月廿六日大久保公より大義と果し、稍横濱に着港し、あぞ海を懸ぎし船々よの敷祭の祝砲と放つ音心地よた迄響き渡るべ陸より敷

百の庶人民がめく齊しく禮服を着し波戸場狭し
 と出迎へる其状最も晴やうあり殊更し市街もくも成
 軒毎に國旗を立或ハ球燈を飾りあどして何れも歡
 びの聲を發し相賀せざるはふうりなり此時既し大久保公
 の上陸し及をまつ豫て設けの馬車に乗る大藏省
 の出張所し至るべ太政大臣三條公とをどめ其他大小
 の諸官貞列と正しく此席しめめく蒞受け居られし
 就中三條公も既し勅旨を奉たりとく是迄迎

へらきたるま中人厚き慮の御旨を演らる無異し
 着港より紙賀して俱に歡びの眉をぞ開くる斯く
 大久保大臣も此席と辭し去り町會所の商閣に
 至らるふ茲より横濱中の市民等がきり一同に拜賀
 せり其時高島徳右エ門といふ者市民等が惣代とあり
 て正面に進み出一條の祝詞を演じ大臣よりも之に
 應じ又一條の答詞より此事果て高島ハ更し盃紙
 捧げ祝し酒宴を聞き大臣より天皇のうらへ

多た天顔と少一も疾く拝せんと頻りふ心の急ぐる
 且バ此席と程よく辞し頃て蒸気車より乗
 下左右一々新橋ある「ステーション」に到らるれば這処
 より豫て御所より一に迎ひの為は官負数名且つ
 近衛隊の兵士等が右左りみ並び居る大臣の着
 りや否や乍ら音楽と奏し又大臣と守護し
 遂に帝宮に参らざる余は西郷都督を専ら
 武徳と輝りし彼の野蛮等と降伏さしり蕃

地は陣屋を造り設け在留する夏半稔余り成
 炎暑に膚を焦され或は異邦の風土に犯され千
 辛万苦の多しと雖も些は是を勞とせむ自然支那
 の談判破れ兵を開くに至りあつ小勢ありと
 何れ怖れん其臺灣府より所支那の衛兵を打
 破り此全島を畧奪し尚何れなく軍艦に乗て
 天津口を襲来る北京迄も攻登り烈しき一
 戦に及んんと拳を握りて扣へ既よ大久保



大臣の此島よ

立寄られて支那の

談判恁々そ術よく

和議の整ひ一昔演説よ

及むれ一く都督も又み血

ぬるび一く国威を海外に輝きを

且ツ歡び且ツ安堵一く稍陣拂いの準備

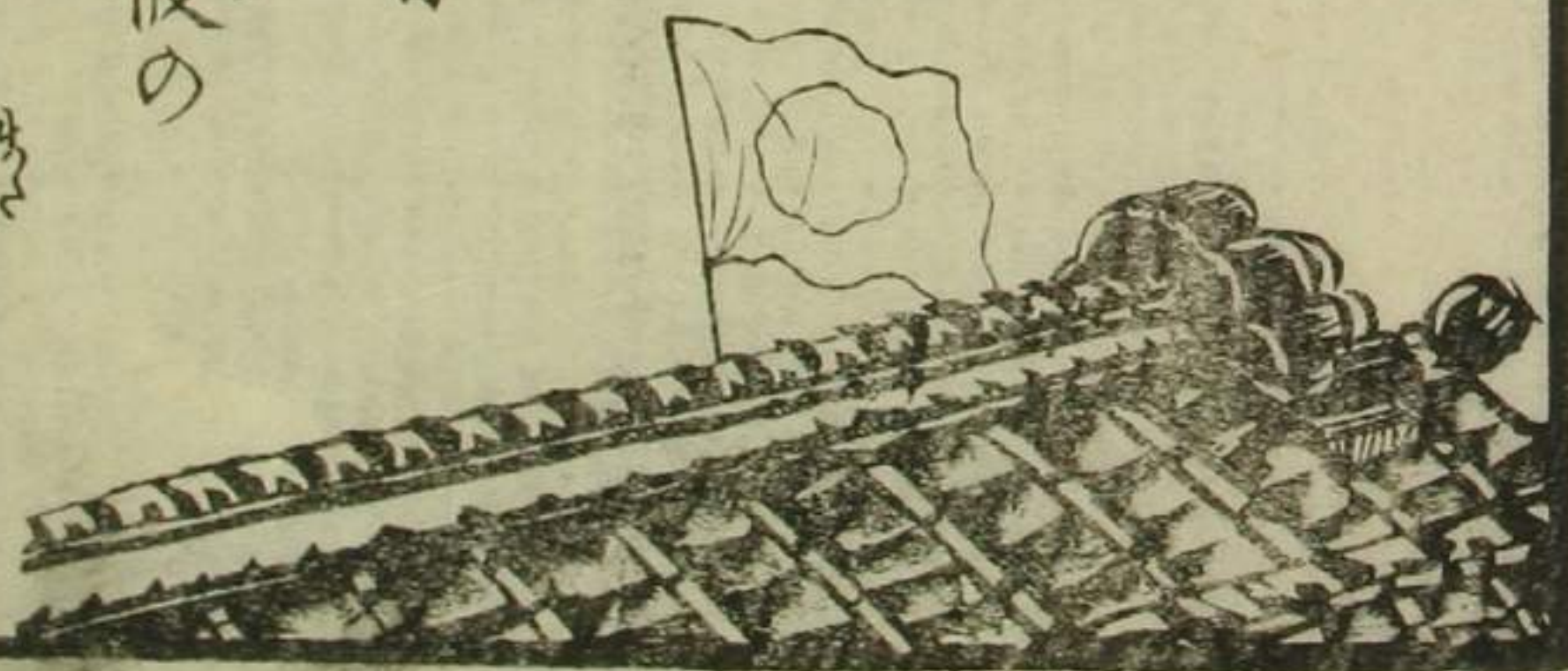
あり左右さるるち勅使一く東久世の着船

せうと敵首の赴き傳へられは是ふ於て都督

よの蕃地の兵を引纏め頃て凱歌を唱へつ彼の

島を出帆あり日を経る横濱に着港ありみそ又あはれ

迎ふる者多く其時此地の人民等が都督の帰朝あり



一 祝賀一 又一條の祝詞を述ぶ西郷都督も
おとふ應ずる復一條の答辞あり憊て此地の人民等が
拜賀も既に終りしべ將士等と引俱しく稍京着し及
ち々々を見る者歡喜雀躍して皆万歳を唱ゆるあり
屋一斯の如くふ臺灣の事件及び支那の談判も
残る方多く首尾整ひ三千万餘の人民が何れも安堵
ありたるふ夫ふ引久支那ありとい肩肘張らして百般
と国中が騒ぎ立議論を吐きし甲斐もなく到底

五十万兩といふ償ひ金を出せしめ兵と開くふ
至らざる故辨へもあは愚民等の安堵の思ひ成
みせしものごとく中身の慷慨の士をありて尚種々
ある物議も生じいまぞ穩くありざる所へ乍ち降る
涌たる如き一大事とを與り出され開はる何事
の事件ありん次の巻に綴る成着るべし

明治太平記十一編卷之一終

